

算命学中庸

【初年】 20回目

20回目の授業はこのページからです。

授業科目 【干支】 相生・相剋・比和

・【初年】 20回目【干支】 01

^{かんし}干支という勉強にはいります。

干支は「十干」と（十二支）でセットになっています。

干支の上「天干」と 干支の下（地支）の関係が『相生』^{そうしょう}になっている。

『相剋』^{そうこく}になっている。

『比和』^{ひわ}になっている。

これら3つの組み合わせがあります。

それらの組み合わせによって、占いに発展してゆきます。

干支は【初年】9回目【六十干支^{ろくじゅうかんし}】の授業で学びましたように60個の干支があります。

それら60個の干支を、5つの型^{かた}に分類することができます。

干支は『相生・相剋・比和』を5種類の型に分類できます。

参考：型（いくつかの種類に分けられるもの）

『相生^{そうしょう}』『相剋^{そうこく}』『比和^{ひわ}』これらは5つの型になります。具体的に進めていきますので、おわかりになります。

相生・相剋・比和については、すでに勉強していますので、ご理解されているとおもいます。

『相生』は〔自分から相手を生じる場合〕〔自分が相手から生じられる場合〕2通りあります。

『相剋』も〔相手を剋していく場合〕〔相手から剋される場合〕2種類あります。

『比和』は〔おなじ者同士の関係〕なので、これは1つしかありません。

60個の干支は、相生は②種類あり、相剋も②種類あり、比和が①種類ですから、全部で5つの型です。

この関係を宿命に当てはめて、占いにつかっていくわけです。

宿命に干支を当てはめるときは「日干支=自分自身」でみます。

〔たとえば〕2007年（H19）1月21日生まれの宿命は……前年2006年の「年干支」になります。2007年は2月4日からです。

	日干支	月干支	年干支
木性	乙	辛	丙
木性	卯	丑	戌
	比和		

宿命（1）2007-1-21 生まれ

にっかんし
 日干支の「乙卯」が自分自身です。
 日干支が『相生』なのか、『相剋』
 なのか、『比和』なのかをみます。

この人の場合は、日干支の上は「乙」の木性です。

下は（卯）の木性ですから、『比和』になっています。

つまり、日干は「乙木」で、日支は（卯木）ですから、上も下も木性です。上下ともに五行は木性です。

自分自身、つまり「日干支」の上と下が『相生』になる人もいれば、上と下が『相剋』になっている場合もあります。そして『比和』になる場合もあります。

それゆえ、5種類の型に分類できます。

「日干支」はその人自身ですから、日干支に内在されている性質の特徴が出てきます。

「日干支」は自分自身がいる場所です。厳密に言えば「日干」は自分の場所、(日支)は配偶者の場所、という意味があります。

「日干支」の上に位置する「天干=日干」に自分自身が座っています。(日支)は自分の下に位置していますが、上下関係の意味ではありません。算命学は「夫と妻は同等」と考えています。

ここでは大きく捉えて、日干支は自分のいる場所と考えてください。参考：捉える〔物事の特徴・本質・内容などを把握する〕

【初年】1回目【宿命と運命】17頁を参照するとよいでしょう。

小泉進次郎の宿命でいえば、日干支「壬戌」の天干にある「壬」が本人です。その下の日支(戌)は妻の場所になります。詳しくは、そのような意味合いが含まれていますが、現在の勉強の段階としては、大きく捉えて頂いて、日干支は自分のいる場所と考えてください。

これらに内在されている意味は、勉強が進めば必ず理解できます。

⇒ 『相剋』 から始めます。

①

宿命 (2) 相剋 ① ②

○ 日干



日干が日支を剋こくしています

○ 日支

この相剋の型は「日干」が（日支）を剋していく人

②

○ 日干



日干が日支から剋こくされています

○ 日支

この相剋の型は（日支）から「日干」が剋こくされる人

日干支の場合は2つの型があります。

△（剋す）（剋される）の（→）（×）の印しるしについてですが
算命中庸では（木→×→土）あるいは（木→×土）どちらかの
矢印記号をつかっていきます。

どちらも相剋しるしの印です。 ご了承ください。

〔たとえば〕**Ⓐ**⇒日干支が「^{こうぼくのたつど}甲辰」の人は、上が木性です。下が土性です。(木→✕→土)と上が下を剋す姿になっています。

宿命 (3) ⒶⒷⒸⒹ

Ⓐ

木 甲
✕
土 辰

木は土のなかに根っこを張って、土のなかの養分や水分を奪っていきます。上の自分が相手をやっつけるという姿になっています。

Ⓑ

水 壬
✕
火 午

「^{じんすいのうまび}壬午」という干支の人であれば、^{じん}壬は水性で、^{うま}午は火性です。上が水で下が火になれば、(水→✕→火)と水が火をやっつける姿です。火を消してしまうので、上が下をやっつける姿になっています。

Ⓐ『上が下を剋す型』になっている干支の人は、自分のほうから相手を剋していく姿です。

Ⓑ『上が下を剋す型』です。自分が下にいる相手を剋します。

逆に、**Ⓒ**のように〔相手から自分が剋される型〕になっている人もいます。お解りになりますか……？



③ [たとえば] ③日干支が「甲申」の人は、

(金→~~X~~→木) と、下が上を剋します。

金性を刃物にたとえますから、木を切ったり、傷つけたりすることができます。

「甲」の人は、下の金性から (金→~~X~~→木) と自分が傷つけられている姿です。



④ あるいは、④日干支「癸未」という人は、

(土→~~X~~→水) と、土は水を堰^せき止めたり、

水を土で汚してしまう、つまり水の質をやっつけてしまうことができます。

①と②は「自分が相手を剋していく」という相剋の姿です。

逆に③と④のように「下から剋される」という相剋の姿があります。相剋でも2通りあるわけです。

そうしますと、つぎのように考えてゆくわけです。

⑤日干支が「^{じんすいのうまび}壬午」なら、日干「壬」が自分自身です。

この場合の下というのは地支（午）のことです。

「壬午」は上が下を剋します。自分が相手を剋していく人です。

〔たとえば〕日干支が「癸巳」で（癸水 → 巳火）という相剋であれば、「癸水＝自分」が、日支（巳火）を剋している姿です。自分が水で（水 → 火）と火を消す姿です。そうしますと、自分が相手の性格を消してしまふ。相手がチカラを出せないようにしてしまふ。相手が火の質をだせないようにしてしまふ。というふうに考えるわけです。

㊸㊹のように「日干」が（日支）を剋していく人は……

・ 自主性が強い

自主性が強い人になります。というふうに考えます。

日干は自分自身です。

（水 → 火）とか（木 → 土）とか、その姿はさまざまですが、自分が相手をやっつけて、相手の性質を出させないようにしてしまふ。そういう姿の宿命です。

いいかえれば、相手の性質を出させないで、自分の性質を強く押し出そうとする人です。

・ 相手の意見よりも、自分の意見を重視する人。

相手の意見よりも、自分の意見を重視する人になります。

このように考えます。

上が下を剋す人、自分から相手を剋していく人は、自分から相手を相剋して、やっつけちゃうわけです。

“やっつける”という言葉は、占いとしては好ましくありませんので、“相手の質を^{おさ}抑えて（押さえて）しまう”といえよらしいですね。

参考：抑える〔いきおいをとめる〕 参考：押さえる〔うごかないようにする〕

相手の質を抑えてしまう、ということですから、相手の意見を^{ふう}封じて、自分の意見を重視する人といえます。一言でいえば「自主性が強い人」です。という意味合いになるでしょう

参考・自主性〔他に依存せず、自分で考え、自分の力で行動する性質〕

△（剋す）（剋される）の（→）（×）の^{しるし}印についてですが
算命学では（木→×土）または（木→×土）のどちらかの矢印記号をつかっていきます。

⇒ 逆に——相手から剋される人はどうでしょう。

◎日干支「甲申」のように、日干が日支から剋されている（下が上を剋してくる人）は、自分のほうがやっつけられています。（金→木）と自分が剋されています。

④は（土→水）と自分が^{よくあつ}抑圧されています。

自分が押え込まれているために、どうしても自分自身の自主性を出せないわけです。

参考：自主性〔ほかに頼らず、自分の力で考えたり行ったりすることのできる質〕

・自主性が弱い人

自主性が弱い人になります。ということです。

自主性が弱いので、相手の考え方とか^{じゅうし}意見を重視してあげる人です。ともいえるわけです。

自分が押さえられているので、自分自身を^{よくせい}抑制することができます。自分をおさえとどめる人です。

・相手の意見を重視する

参考：重視〔その物事を重要だと考えること〕

相手の意見を重視する人。というふうに考えるわけです。

自分が相手に抑えられてしまうという意味で、自主性にこだわらない人ともいえますし、自分の意見や考えを出さない人、自主性の弱い人ともいえます。

ⒶⒷ と ⒸⒹ には、このような違いがあるということになりますが、どちらが「よいとか」「悪いとか」を問えません。

このことは宿命の特徴の1つであって、自主性が強いからよいとは決まっていませんし、自主性が弱いから悪いとも決まっていないのです。

＊ じょうこうごう み ち こ 上皇后美智子 1934(s9)-10-20 宿命(4)美智子皇太后

	甲	甲	甲		貫索星	天印星	4 癸酉
戌	子	戌	戌	玉堂星	調舒星	調舒星	14 壬申
亥		辛	辛	天恍星	貫索星	天印星	24 辛未
		丁	丁				34 庚午
	癸	戊	戊				44 己巳
							54 戊辰
							64 丁卯
							74 丙寅
							86 乙丑

あきしののみやふみひとしんのう
 ＊ 秋篠宮文人親王

1965(s40)-11-30

宿命(7) 秋篠宮

						8 丙戌	
	戊	丁	乙		牽牛星	天禄星	18 乙酉
午	子	亥	巳	司禄星	禄存星	龍高星	28 甲申
未	辛		戊	天報星	玉堂星	天馳星	38 癸未
	丁	甲	庚				48 壬午
	癸	壬	丙				58 辛巳
							68 庚辰

ふみひとしんのうひきこ
 ＊ 文人親王妃紀子

1966(s41)-9-11

宿命(8) 紀子妃

							2 丙申
	癸	丁	丙		司禄星	天馳星	12 乙未
戌	酉	酉	午	龍高星	龍高星	車騎星	22 甲午
亥				天胡星	禄存星	天胡星	32 癸巳
			己				42 壬辰
	辛	癸	乙				52 辛卯
							62 庚寅

＊ ^{れいわてんのう} 令和天皇・^{なるひと} 徳仁 1960(s35)-2-23

辛 戌 庚

宿命(9) 令和天皇

申 巳 寅 子

酉

令和天皇の宿命を読んでみましょう。

宿命を読むときは、必ず「年干支」から読みます。

令和天皇の宿命：

「庚子こうきんのねすい」「戌寅ぼどのとらぼく」「辛巳^{しんきんのみび}」

♪♪ 声に出して、練習してください。

(巳)の五行は火性ですから^びを付けました

令和天皇の日干支をみると「辛巳^{しんきんのみび}」です。

天干は「辛^{しんきん}金」で、地支は(巳^{みび}火)です。

つまり、上が金性で、下は火性です。

令和天皇自身は「辛金」ですから、五行は金性です。

^{いま}現在の勉強の段階では、宿命を見ただけでは……相剋とか、相生とか、ピンと来ない方もいらっしゃると思いますが、^な慣れるとすぐ判るようになります。

慣れるには、実際にノートに書いて、相生なのか、相剋なのか、確かめるとよいでしょう。



宿命（10）令和天皇

令和天皇の場合は（火→×金）と、下が上を剋す姿です。

火性は金性を溶かす、やっつけることができます。

下からやっつけられています。

下から抑えられています。

自分自身が相手から剋されていますから、この人は自分を抑えようとする人です。

自主性が弱い

自分の自主性をあまり出せない人ともいえます。

それが「よいのか」「悪いのか」わからないのですが、

つぎのような考え方はできます。日本は「象徴天皇制」しょうちょうてんのうせいです。戦前のように天皇が実権力を行使できません。

その意味では、適合しているともいえるわけです。

自主性が強ければ、象徴天皇としての役割を逸脱いつだつしてしまうかもしれません。それは困ります。

いま現在の天皇をはいけん拝見して、いかがが想われますか……？

あきしののみや
 ＊ 秋篠宮 1965(s40)-11-30

戊 丁 乙

宿命(11)秋篠宮

午 子 亥 巳

未

秋篠宮様の宿命を読んでみましょう。

宿命を読むときは、必ず「年干支」から読みます。

秋篠宮の宿命：

「乙巳おつぼくのみび」「丁亥ていかのいすい」「戊子ぼどのねすい」

♪♪ 声に出して、練習してください。

(亥)の五行は水性ですからすいを付けました



秋篠宮の月干支をみると「丁亥 ていかのいすい」です。

秋篠宮様の日干支は「戊子」ですから、土と水です。

土	戊	丁	乙
×	子	亥	巳
水			

宿命(12)秋篠宮

上は土で「天干は土」、下は水（地支は水）です。

これは（土→×水）と、土は水を堰き止めてしまうことができます。土が水をやっつけています。

秋篠宮様は令和天皇と反対で、自分が相手を押さえてしまふ、やっつけてしまふ、相手の質を出させないようにしてしまふわけですから、自分の質を優先します。

自主性が強い

自主性が強い人です。という意味になります。

⇒ 日干支のところだけを観ると……令和天皇は自主性の弱い人です。秋篠宮様は自主性の強い人というふうになります。しかし、そのことが「よいこと」「悪いこと」それは決まっていないわけです。

“自主性が弱い” というのは



自分の自主性が出せない（頼りにならない人）

自分に自主性があっても、それを出せない人だとすれば、他人から見たときに、“頼りにならない人” というふう^{ひと}に評価されてしまふこともあるわけです。

逆に、よいほうにもできます。自分を前面に押しださない^{ひと}ので、好ましく評価される場合もあるのです。

自主性が弱いというのは〔相手に配慮する〕〔我侷^{わがまま}をいわない〕つまり、真面目な人といえるでしょう。

誠実な人

ふつう真面目な人というのは、自分の自主性を強く出そうとはしないでしょ。きちんと決まり事などを守って自分の我^がを通そうとしないはず。

自主性をださない人は、そのような人物です。ともいえるわけ。

よいほうに出れば〔ごまかしが無い人〕、悪いほうに出れば〔頼りない人〕になってしまいます。

どちらになるのかは、これだけではわからないのです。つまり、「日干支」だけだとわかりません。

いずれにしても“自主性は弱い人です”と、いうだけであって、このことが、よいとか、悪いとか、論じることにはできません。

令和天皇は、誠実なお人柄といえるのではありませんか、「雅子さんのことは僕が一生全力でお守りしますから——」お言葉です。

「天皇として自己の研鑽^{けんさん}に励む^{はげ}——」お言葉です。

皇居内のお姿はわかりませんが、自分の我が儘^{わ まま}をいわないで、いらせられると想^{おも}えます。

皆さまはどのようにお感じになりますでしょうか……。

かなり前になりますが、記者会見でお怒^{おこ}りになったことがありましたが、あれは——ご自身のことではなくて、雅子様のことなので我慢できなかった。

⇒ それに対して……自主性が強いというふうな宿命は、“自主性が強い”ここだけをみると、なにか立派な人、頼りになる人、そのようにみえるかも知れません。

“自主性が強い”というのは



自分の力で生きようとする人（頼りになる人）

自主性が強い人は指図を受けず、自分で行動しますから、“自分のチカラでやろう”とする人になります。

そういう人は、よいほうに出れば、頼もしい人だなど、まわりから見られるでしょう。

悪く出れば、我が儘^{わがまま}とか自己顕示^{じこけんじ}にもつながります。

わがまま

どういう自主性を出すのかわかりませんが我が儘です。

〔たとえば〕“これをやりなさい”といわれたのに、別のことをやるとか、そういう自主性かも知れませんよ。さまざまな自主性の姿はあるでしょうが、悪くすると、自分勝手な人物になってしまう。そういう可能性があるわけです。

参考・自主性〔他者に依存しないで自分で行動することができる性質〕

参考：我が儘〔自分の思いどおりにする。そうならないと気がすまない〕

参考：自己顕示〔自己を著しく他人に目立たせるように行動する〕

あきしのみや
☞ 秋篠宮様はどうでしょう。

“自分の思いどおりにしたい”というような質はかなりでているのでは、いかがが思いますか……。

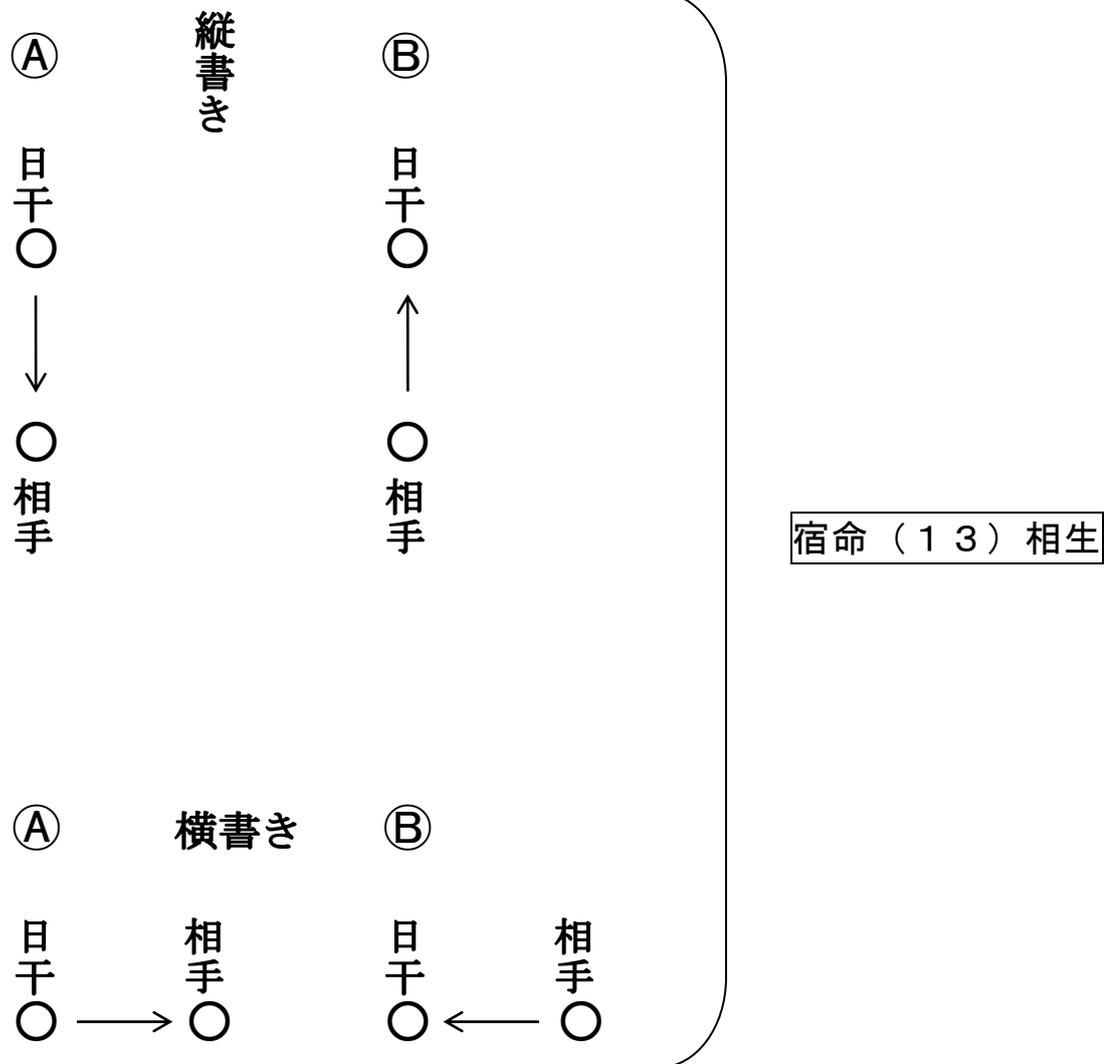
〔たとえば〕“タイに行きたい”といえ、まわりが止めてもタイへ行く。そういう人になる傾向をもちます。

〔髭をはやしたい〕と思えば、反対されても生^はやす。例えばそういうことです。（反対はされないでしょう）

明治天皇・大正天皇・昭和天皇は髭^{ひげ}を生^はやしていました。

髭^{ひげ}を生^はやすのが、よいとか、悪いとか、ではなくて、そういう自主性の出し方もあります。ということです。

⇒ 『相生』 です。



相生の場合も 2通りあります。

①自分が相手を生じる場合、つまり日干が下を生じる場合と、②反対に、相手から生じられる場合の 2通りです。

「日干=自分」から相手を助ける場合と、相手から助けられるのを待っている場合の 2通りあるわけです。

いずれにしても、「日干」は自分自身ですから〔自分が相手を助けに行こうとする人〕と、逆に〔相手から助けられるのを待っている人〕では、どちらの人が、積極的といえるでしょう。

自分から相手を助けるほうは、積極性がありますよね。そうしますと、

日干 ① 相手
○ → ○ 積極的 　　そういう人になっていきます。

それに対して、こちらは相手から助けられるのを待っている姿ですから、消極的な人です。

日干 ② 相手
○ ← ○ 消極的 　　そういう人になっていきます。

(相手から助けられるのを待っている)

相手 日干 相手 日干
(水→木) とか (木→火) とか〔相手が自分を相生してくれる〕〔助けてくれるのを待っている〕わけですから、消極的で受身の人です。といえます。

受け身

“自分が相手を生じる”というのは『相生』の姿そうしょうですから、相手を助けるような関係だと、最初のお伝えしたと思います。(木→火) (金→水) とか、自分が相手を助ける。あるいは、助けようとする側ということで、
“面倒見めんどみのよい人”になるわけです。

積極的といいましたが、これに付け加えれば、



Ⓑは本人が受身です。助けられるのを待っています。

「私のほうが、助けられるのよ」と、そういうタイプの人になるので、Ⓑは面倒見が悪いわけです。



ところが……このことも誤解しやすい部分です。

㊤のように、自分から相手を生じる人は、面倒見のよい男性みたいなので、「私はこの人とお付き合いしたいわ」と、想いを抱く方もいると思うのですが、どうでしょう？

㊦のように、相手から生じられるのを待っているような人は、受け身だし、面倒見が悪いからよくないのではとか、消極的だと世の中で成功しにくいのではとか、そのような心象をもつ人もいると思うのですが、これもよい悪いは全くわからないのです。

なぜかといえば、この事柄は「干支」の特徴であって、このことがよくでるのか、悪くでるのかは、そのときの環境とか、状況とか、相手にもよるからです。

自分が相手を生じる「干支」は、積極的で面倒見がよいといいましたが、悪く出たら、どうなると思いますか？

面倒見がよい

おせっかい 相手のほうは“面倒みてください”

と、言っていないかも知れないのです。

それでも、私が何とかしてあげたい、面倒見てあげる、

というような人物だとすれば、どうでしょう……？
積極的なのですけど〔おせっかい〕ともいえますし、
悪くいえば〔でしゃばり〕かも知れないわけです。

面倒見がよい

でしゃばり

ただの〔おせっかい〕〔でしゃばり〕になる可能性もある
わけです。

そうしますと、時と場合によって、その干支のもつ良さが
出る場合もあれば、干支のもっている悪いほうが出てし
まう場合もあるということです。

それゆえ、単純に〔いいとか〕〔悪いとか〕いえません。

自分が助けられる人のほうは、消極的で面倒見が悪くて
受け身だということですが、こちらのほうが〔落ち着き
があつていいな……〕そのような評価もあるわけです。

ひかえめで落ちつきがある

⇒ 宿命を例題としてつかいます。

宿命（14）皇室の3女性

こうごうまさこ
皇后雅子

S38. 12. 9

丙 甲 癸

戌 子 卯

じょうこうごう み ち こ
上皇后美智子

S9. 10. 20

甲 甲 甲

子 戌 戌

き こ ひ
紀子妃

S41. 9. 11

癸 丁 丙

酉 酉 午

皇室の女性を3人並べてみましたが、たまたま3人とも『相生関係』になっています。

まず宿命を読みます。「年干支・月干支・日干支」の順番です。

皇后雅子

癸卯（きすいのうぼく） 甲子（こうぼくのねすい） 丙戌（へいかのいぬど）

上皇后美智子

甲戌（こうぼくのいぬど） 甲戌（こうぼくのいぬど） 甲子（こうぼくのねすい）

ふみひとしんの う ひ き こ
文仁親王妃紀子

丙午（へいかのうまび） 丁酉（ていかのとりきん） 癸酉（きすいのとりきん）

♪♪ どうぞ声に出して読んでください。練習です。

宿命（15）皇后雅子

火
 丙 甲 癸
 戊 子 卯
 土
 積極的

皇后雅子様は「丙戌」で（火→土）と、
 上が下を生じる姿になっています。
 火が燃えると（その灰は）土になります。

宿命（16）上皇后美智子

木
 甲 甲 甲
 子 戌 戌
 水
 消極的

上皇后美智子様は「甲子」で（水→木）
 と、水が木を育てる、水が木を助けてく
 れる。下が上を生じる姿になっています
 から、こちらのほうが消極的です。

宿命（17）紀子妃

水
 癸 丁 丙
 酉 酉 午
 金
 消極的

紀子妃は「癸酉」で（金→水）金が水を
 生み出す。この姿は、上皇后美智子様と
 おなじように、下が上を生じています。
 ゆえに消極的で受け身です。

- ・ 雅子様は自分のほうから、相手を生じて行く姿です。
- ・ 上皇后美智子様と紀子様は、相手から生じられる、相手から助けてもらう姿です。

このように、生じる向きが、雅子様とは全く逆になっています。

『相生』は元々^{もともと}“助ける”という意味があります。

「甲子」のように（水→木）であれば、水が木を育てます。水が木を助けてくれます。

助けられるのを待っているから受け身なので、消極的といいましたが、[まわりの人がこの人を助けてくれて、この人の面倒をみてくれます] という意味が横たわっています。つまり、そのような環境には向いているのです。自分は受身にしていけばよいということです。

そうしますと、平成時代の皇室にはどちらのほう合っているのでしょうか。[向き不向きという意味では……]

「平成天皇ご自身は受け身でした」と、申しても過言ではありませんので、美智子様・紀様のように、消極的で受け身のほうが皇室には向いています。

宿命（18）上皇后美智子

木
 ↗ 甲 甲 甲 美智子様は「甲子」で、下が上を生じる
 ↘ 子 戌 戌 姿になっています。

水

消極的
 周りが助けてくれる
 面倒見てくれる
 という環境には
 向いている

自分から、あれやりたい、これやりたいといわないで、受身にしていけば、まわりが動いてくれて、いろいろと助けてくれます。という立場ですよ。

それゆえ、美智子様の「日干支」の姿だけを考えますと平成の皇室には適合していました。

まわりが（水→木）とか（金→水）とか、助けてくれるわけです。

普通の家へお嫁に行くのに比べれば、皇室は受け身の姿でいられます。受け身でいるほうがよいともいえます。

「あのごとくなさりませ」といわれて、「わかりました」と、おこなうことが多いでしょう。

⇒ 雅子様の日干支「丙戌」は積極的です。

本来、面倒見がよいわけです。

この宿命は（火→土）と積極的にうごきたいのです。

それなのに自分からは動けない、誰の面倒も見ることができない、出しゃばってもいけない、おせっかいもいけない。となると、これは非常につらいです。

「あのようになさってはいけません」「外国に行ってはいけません」といわれたら、本人は極度につらいはずです。積極的にやりたいことが出来て、いいたいことを言えて、という環境のほうが、雅様に合っているわけです。

本来の宿命がそうであり、そういうお人柄なのに、それができないわけです。それは宿命どおりではないので、非常に苦しいお立場であったわけです。

もともと、雅様は外交官を目指していたのです。

宿命（16）上皇后美智子 **宿命（17）紀子妃** のほうは、本来が消極的ですから「あれしちゃだめですよ、これしちゃだめですよ」といわれたとしても、もともと受け身ですから、そのほうが楽でいいと、いうことになるのです。

まわりから助けてもらおうお立場は合っています。

自分から積極的にうごくよりも、まわりから面倒を見てもらって、助けてもらって……いわれたことだけをする状況に合っています。ということになります。

⇒ 雅子様のような宿命で、本来、自分もっている資質^{おさ}を抑えなければならない。それは大変つらいですね。このように考えるわけです。そうしますと、性質がよいとか、悪いとか、という意味はもともと無いのです。

その人の置かれた環境とか、立場などによって「この人の宿命は、このような立場に合っています」とか「こういう環境には向かないですね」とか、そのようになります。そこではじめて、この宿命にはよい（向いている）とか、この宿命には悪い（向いていない）とかの結果が出て来ることになります。

^{たんてき}端的に言えば、環境が宿命に向いていれば生きやすい、向いていなければ生きにくい。といえるわけです。

宿命そのものには、[いいとか・悪いとか] そういう意味はないのです。 参考：捉える〔物事の特徴・本質・内容などを把握する〕

占うときは、宿命の大筋を捉えて、観る必要があります。

☞ 宿命の「日干」は自分です。といたしました。

（日支）にも人物を配置できます。

日支には、その人物の配偶者が座ります。

つまり、結婚相手の場所（配偶者の場所）という意味があります。

〔たとえば〕 山田さん（男性） 小山さん（女性）

山田さんと小山さんが結婚すると『干支の世界では』小山さんは強制的に山田さんの日支（妻の場所で妻座^{さいざ}という）に座ることになります。

そして、山田さんは小山さんの日支（夫の場所で夫座^{ふうざ}という）に座ることになります。

どなたでも結婚するとこのようになります。

宿命には六干支「上に三つの干」（下に三つの支）出てきますから、親の場所とか、子供の場所とか、いろいろ場所が決まっています。

それゆえ、それらの場所の意味合いも含めて、観ていくようになります。

人物とか場所の意味合いは、もう少し先で勉強するようになります。

⇒ 『比和』 になる干支です。

比和
日干
○
—
○
相手

縦書き

比和 横書き
日干 相手
○ — ○

宿命 (19) 比和

上と下がおなじもの同士を『比和』とといいます。

上と下がおなじになっている干支を『比和』とといいます。

日干支	月干支	年干支
丙午	甲寅	辛酉

宿命 (20) 比和 — [たとえば]

「丙午」 丙は火性で、午も火性です。

「甲寅」 甲は木性で、寅も木性です。

「辛酉」 辛は金性で、酉も金性です。

比和の干支 ⇒ 専気

上記3つのほかにもありますが、比和の干支だけは名前が付いています。

『比和』の干支を『専気 せんき』とといいます。

もう少し先に勉強が進みますと、たびたび『専気』という言葉が出てきます。

『専気』天干（上）も 地支（下）も、五行がおなじです。つまり、「気」が片寄っています。

「気」が一方づいています。という意味です。

⇒ 「日干支」が専気せんきの人は、どのような特徴があるのか
といえは……。

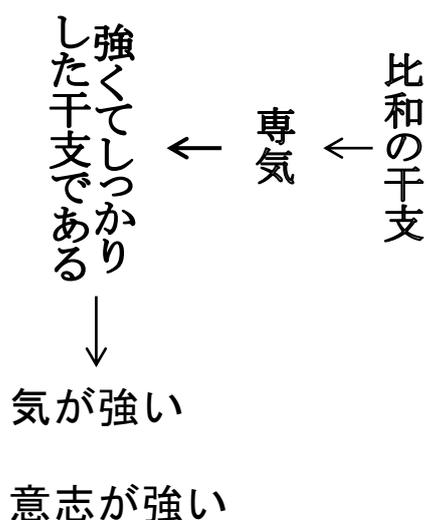
日 干 支	宿命（21）専気		
火 丙		○	○
火 午		○	○

〔たとえば〕「丙へい午のうまび」という干支は、上も火で、下も火です。この姿は、火が1個あるよりも、火が2個あるほうが火力は強いです。というふうに考えます。

このことは水でもおなじで、「壬じんすい子のねすい」とか「癸きいすい亥のいすい」とか、水も1個あるよりも、2個あるほうが、水の力は強いです。

『比和』の干支というのは、どれでも考え方はおなじです。金性も1個だけあるよりも、2個あるほうが、金性のチカラが強い。というふうに考えます。

それゆえ専気の干支には“強い”という意味があります。



強くてしっかりした干支です。

「強くてしっかりしている火性」とか「強くてしっかりしている木性」という意味があります。

人間に置き換えれば、[気が強い]とか[意志が強い]という、意味合いになってきます。

ここで“しっかりしている”という言葉をつかいましたけど、“しっかりした人”なにか^ほ誉め言葉のようになってしまいます。

もちろん“しっかりした人”という姿として出る場合も多いのですが、そのことがよいのかどうか、それはわかりません。つまり、宿命によるのです。

専気の干支の人は、気が強く、意志が強いわけですから、



頑固

物事に動じない

融通がきかない

頑固とか、物事に動じない、あるいは、^{ゆうずう}融通がきかない面があり、強くてしっかりしている。そのようにいえます。それは長所にもなれば、短所にもなる可能性をもっています。

“融通がきかない”ということでは……、

[たとえば] リストラとかで、必然的にほかの生き方を求められたときに、あたかも根を張ったように強いため、なかなか自分の生き方を変えることができないのです。そういう質を内在しています。

前にちらっとやりましたけど……小泉前首相の日干支は

^{しんきんのとりきん}
「辛酉」ですから『専気』です。

上も金性、下も金性です。

気が強くて、意志も強いです。

自分の考え方を曲げようとしなない人といえます。

その質がよいほうへ出るのか、悪いほうに出るのか……

“時と場合”にもよりますので、日干支が『専気』というだけでは、決めることはできないのです。

しかも、小泉前首相の宿命は特殊です。

極めて器が大きい^{だいさんごうかいきよく}「大三合会局」加えて「^{きんせい いっきかく}金性一気格」
という宿命です。

⇒ 【干支】について話しを進めてきました。

『相生』だとかこういう意味になるとか……

『相剋』だとかこういう意味になるとか……

『比和』だとこのような意味だとか……

さまざまでした

ここでの考え方は、あとあと、必ず必要になってきます。
それゆえ、なぜ『相生』の場合はこういう意味になるのか、
なんで『比和』だと……こういう意味になるのか、
ということを、ご理解できていれば大丈夫です。

『相生』『相剋』『比和』をつかって、より高度な占いに
発展していくようになります。

【初年】20回目【干支】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】21回目【中庸思想】
ちゅうようしそう